

リミテッド状況相談デスク

コーディネーター 高橋悦子・中島和子

相談員：奥村安寿子・高橋悦子・田中ネリダ・山下一枝・李原翔

BMCN 理事：櫻井千穂・中島和子・真嶋潤子

概要

今年度の新しい試みであるリミテッド状況相談デスクは、2017年4月に開設した「リミテッド状況相談室」の相談員や言語教育専門家（主に BMCN 理事）と共に、会員が抱えるさまざまな課題について気軽に話し合う場を提供することを目的としたものである。ケースを事前に募集して7件採択、資料を小冊子にまとめて参加者に配布した。7つのケースとは、幼少期一小学校低学年対象の「一時的リミテッド状況」に関する相談（2件）、日本在住外国系高校生の学習や指導上の問題（4件）、第2言語による幼児のための読書活動（1件）であった。大半を占めた高校生の問題とは、母国と日本とを行き来して育った「往還型バイリンガル」や聴くことだけ2言語でその他すべて日本語の「聴解型バイリンガル」などの、極端に低い「自己肯定感」をどのように高めて学習につなげるか、どの言語でも作文が一行も書けない生徒への指導、母国の学習体験に根ざす問題を抱えた生徒への対処などである。相談デスクは、会場運営の課題（マイクが必要、など）を除いては極めて好評であり、以下の点で BMCN にとって大きな収穫となった。a) 特別支援教育関係の相談員と言語教育専門家が協力・連携して相談に応じることができたこと、b) 様々な母語背景の CLD 児に対して、スペイン語、中国語などを母語とする BMCN 相談員が重要な役割を果たせたこと、c) 日本語の読み書き能力が極めて低い高校生に対して基礎的な言語能力の補習だけでなく、年齢相応の課題を考えさせ、挑戦させるグループ指導の必要性（つまり「教科学習言語能力」の指導）、d) 卒業後の職業選択を視野に入れた母語力と日本語力を教科する指導のあり方、e) 個人情報保護法との関係で生育歴など、必要な情報が得られない状況における対処（例えば EU の「私のパスポート」の導入）などである。相談内容の詳細は以下の「相談内容と回答のまとめ」を参照のこと。（中島）

相談の背景・内容と回答のまとめ

* ケースの説明中、番号 1, 2, 3 は相談の背景と内容、a, b, c, は回答のまとめ。

ケース A リミテッド状況小学生への日本語指導

1. 学年（ 小学6年 ）
2. 国籍（ アジア、非漢字圏 ）
3. 知りたいこと・相談したいことは何ですか。

一時的ダブルリミテッドに陥っているような児童に対して、一般的にどのような指導をして行けばいいのでしょうか？ どちらの言語でも説明をちゃんと聞こうとせず、漢字を書いたり、計算をしたりすることはできるのですが、読解力がつかず成績も伸び悩ん

でいます。本人は、出来るつもりでおり、でも実際は出来ないことにフラストレーションを感じているのか、突然キレて、友達や兄弟に暴力を振るう事が出てきています。家庭の中で母語ベトナム語できちんと話せているようでもありません。来年は中学生です。このまま、物事をきちんと理解できないまま成長するのでしょうか？将来的には解消するのでしょうか？

- a. 一時的リミテッド状況といっても、子どものケースはそれぞれ。まず、何ができて、何につまずいているのかを具体的に見極める必要がある。
- b. 漢字や計算といった局所的な力だけを見て判断するのではなく、仮に読解力に課題があるのなら、DLA<読む>を実施するなどして、どのレベルのテキストをどのように理解できるかを包括的にみる。
- c. 本人がやる気を示すもの（興味があるもの、強み）を探り、それをきっかけに学習を進める。
- d. 子どもが学習に向かえない理由は直接的なものだけとは限らない。学校の環境（子どものルーツを認める雰囲気があるかなど）、友達との関係、家庭環境などの周囲の環境も含め、改善できるところは見直す。

ケース B 往還型高校生の日本語力・スペイン語力の課題

1. 学年（ 高校2年 ）
2. 国籍（ 南米 ）
3. 知りたいこと・相談したいことは何ですか。

小学1年頃来日、小学5年2月まで日本に住み友人とのトラブル多くペルー祖父母宅へ帰国小学5年帰国。中学2年頃再来日した。ペルーに帰国した際にはスペイン語力不足のためにペルーの学校で学年相当の学習できず。そのため父母のいる日本へ再来日した。現在日本の定時制高校にいるがスペイン語、日本語ともに学年相当の力がない様子。これからの日本語指導をどのようしたらよいのかお聞きしたい。

- a. 自己肯定感を作ること。例えば、子どもの過去を教師が共に振り返りながら、就職活動に必要な履歴書を一緒に作成するなど。
- b. オリンピックなどを機に、就職で母語力を「+α」として求められるケースあることを強調。但し、履歴書を書いたり、自分の考えを伝えることができるレベルの日本語力が必要。
- c. 指導法の例：母語を活用した授業➡母語を使って書く内容を用意する。日本語より強い母語でまず考え、新たに日本語でその内容をアウトプットする機会を用意する（母

身近にいる男性としてのロールモデルが望ましい。例えばサッカーはレギュラーでなくても顧問の先生がモデルになれるか。

ケース D 特別支援の必要な児童（小1）への日本語指導

1. 学年（ 小学1年 ） 2. 国籍（ 南米 ）

3. 知りたいこと・相談したいことは何ですか。

2学期から、特別支援学級に移籍することになると思うが、支援学級の担任に(国際級の担当者として)引き継ぐことは何か？外国籍児童が支援を受ける場合の特別な配慮があるか？また、校内で共通認識しておかなければならないことは何か？この子の将来的な見通しは？

- a. 小学1年生で4カ月経過して数字が3までしか理解できない、ひらがなは5文字ほどしか覚えることができない。保育園に通った経験もあることを踏まえると、この子どもの困難は言葉の問題でないと考えるべきであり、普通級での生活が著しく困難であることから、特別支援級への転籍は妥当な判断と言える。
- b. 理由は本人の負担が軽減される、自分のレベルにあった内容、教材、スピードで学習することができる。また、親に対する支援やアドバイスも受けることができると思う。このようなケースは保護者の協力が欠かせない。
- c. 外国籍児童の特別支援学級への転籍を検討するに当たっては、その児童が今後日本で生活していく予定であるか否か(帰国する可能性があるかどうか)を確認する必要がある。特別支援教育における生活指導や自立活動は、「日本で生活していく上で」必要な力を身につけることを目的としているため、国が変わると身についたことを十分に活かさない可能性がある。

ケース E 5歳で来日した高校生の日本語力の課題

1. 学年（ 高校2年 ） 2. 国籍（ アジア、非漢字圏 ）

3. 知りたいこと・相談したいことは何ですか。

2つの言語がリミテッド状況である生徒 5才の時来日。耳だけバイリンガル児です。そして、とても自己有能感が低く、そのことがアイデンティティなのか？とすら思えるような言動がよく見られる生徒です。「どうせできないっすよ」「知らないっすよ」「まじむりですよ」の否定語が口癖のような生徒です。そして日本人の友人

に「～しよう」と言われるとついていくため、授業の出席率もかなり良くない生徒です。当然、学習意欲もありませんが、やはり国際級とただ普通級の往来が彼の頭を混乱させたとして自己分析しています。彼の救い(?)は学校の先生が「彼には問題がある」という認識が強く、個別対応に誰も反対しないところです。彼のように自己有能感がまったくなく、日本語しかない生徒にはどのような手立てが必要なのでしょうか。

- a. まず高校生で本人の背景を学校側・教師側が知ることの困難さが話題になった(個人情報保護法の関係)
- b. 本人に自信を持たせる。学習以外で興味を持っていることを指導者側が何らかの方法で聞き出しそれをもとに指導を進める。はじめから勉強に向かわせようとしても反発することが多い。
- c. 学習スタイルは、学習仲間の中で輝くことができる、グループで調べ物やディスカッションなどがおすすめ。
- d. 個別対応で一人の先生が継続的にじっくりとやっていく。関係性の中で一人の人にきちんと見てもらって、信用されている経験がまず大事。

ケース F 母国における様々なつまずきのある生徒への指導

1. 学年 (高校2年)
2. 国籍 (アジア、漢字圏)
3. 知りたいこと・相談したいことは何ですか。

「母語があるから」という前提がまったく通用しませんし、中には母国の学校で教員によるパワハラ(教員の評価が重要視される中国でよくみられる事例です)のため、教室に座っていることが精いっぱいの子供も入学しています。あるいは、日本への不適応(というか自分がここにいることに納得していない)の子供は1日中携帯を離せないでいます。注意、取り上げを試みると日本語が分からないふり、あるいはその瞬間はしまうという感じで効果もありません。母語力が下支えになっていない(中国以外でも母国で学校のシステムが十分でなく教育が不十分な生徒はたくさんいます)場合には高校で何をしたらいいのかが分かりません。以前中国語の先生に診ていただいた際に問題はないといわれていますが彼の書いた作文は小学生程度で学年からかなりかけ離れています。

- a. 会話としては問題ないかもしれないが作文を見ると小学校低学年程度の母語作文力
- b. 作文の内容に関しては時系列の把握はできている、相手の気持ちに立って客観的に観察

